

四川の宣講書『萃美集』五卷——物語化する案証

阿部泰記

一 はじめに

『萃美集』五卷は、清代光緒年間に編纂された「聖諭書」すなわち「聖諭宣講」のテキストで、中国社会科学院文学研究所、上海図書館に残巻を蔵しているが、筆者は最近になって民国二十六年（一九三七年）復刻本が大連図書館に蔵されていることを知った。民国刊本は各巻に「案証」のみを掲載する簡易なテキストであるが、社会科学院蔵本によれば、もともとは巻頭に宣講儀式を冠するテキストであったらしい。本稿ではその全容を把握するとともに、本書によって宣講に用いられた案証（因果応報故事）が聴衆を楽しませるために次第に物語性を持つようになったことを論じたい。

二 各巻の全容

1. 中国社会科学院文学研究所蔵本

竺青「稀見清末白話小説集残巻考述」の記述によれば、以下のごとくである。

- i. 封面を欠き、出版の時代や編者は不詳。
- ii. 巻頭一〜四葉を欠き、五葉から「五、戒廢字」「六、敦人倫」「七、淨心地」「八、立人品」「九、慎交遊」「十、広教化」の箴言を掲載する。² 私見では、この箴言は『文昌帝君蕉窓十則』の後半五則である。このほか、『武聖帝君十二戒規』、『孚佑帝君家規十則』、『竈君男子六戒』、『竈君女子六戒』、『竈君新諭十条』、『玉皇宝訓』、『武聖帝君諭』を掲載している。『玉皇宝訓』と『武聖帝君諭』には「庚子」の干支を記載しており、光緒二十六年（一九〇〇年）だと推測できる。
- iii. 現存する案証は以下のごとくである。
 - 巻一「会円寺」（一〜二十七葉表）、「双貞姑」（二十七葉表〜不詳）、「雷賜銀」、「鸚鵡報」
 - 巻二「破鏡合」、「賽包公」、「献西瓜」、「七層楼」
 - 巻五「血羅衫」（一〜三十八葉）、「玉連環」（三十九〜六十八葉、欠後半）
- iv. 巻一目錄裏葉には「簡州周家場河西信士夏月亭捐刊」と題する。簡州は現在の四川省簡陽市。

v. 卷五目録には「版存銅邑……³⁾」と題する。銅邑は銅梁県(四川省重慶府銅梁県)。

vi. 案証の版式は、半葉八行、行二十一字。

2. 上海図書館蔵本

i. 卷一には冒頭に「宣講聖諭規則」を掲載しない。

ii. 各巻の案証の冒頭に封面を付す。たとえば巻一「双貞姑」の封面には、「今年新刻 八百冊／双貞姑／聖諭書 源盛堂」と題しており、各案証を単行本形式で刊行したテキストである。源盛堂は四川省瀘州の書房であるが、刊行の時期は特定できない。現存する案証は以下のとおりである⁴⁾。

巻一「会円寺」(存二十七葉裏)、「双貞姑」(二十七～四十九葉)、

「雷賜銀」(五十～前六十七葉)、「鸚鵡報」(六十七～二百八葉)

巻二「破鏡合」(二～五十四葉表)、「賽包公」(五十五～七十二

葉)、「猷西瓜」(七十三～九十葉表)、「七層樓」(九十一～一百零八葉)

巻三「雲霞洞」(一～五十葉表)、「双冤曲」(五十一～七十五葉)、「善縁橋」(九十三～一百一十一葉表)

巻四「双冠誥」(二～四十一葉)

iii. 案証の版式は、半葉八行、行二十一字。

3. 大連図書館蔵本

大連図書館には、「萃美集」五巻、(清)吳榮清輯、民國二十六年(一九三七年)、成都王成女齋刻本、五冊一帙⁵⁾を蔵する。

i. 卷一には封面があり、「民國二十六年丁丑重刊／萃美集／板存四川成都古臥龍礪王成文齋住四十八・五十號」と刻しており、復刻本である。

ii. 卷一冒頭には「光緒丙午年(光緒三十二年、一九〇六年)冬月上浣(上旬)岳邑(四川省岳池県)吳永清撰」の「序」を掲載する。この序には、以下のように、簡州の慈善を好む諸氏が果報故事を集めて案証を作成し、神明の条規を記録して世間を善導した、その書が完成して『萃美集』と名付けた、この書によって宣講人をはじめ多くの人が啓発されることを願っている、と本書の縁起について述べている。

簡邑各場好善諸公、搜羅古今果報、撰案証以勸人、録聖神条規、發明男婦過咎、伝諭訓以暁世。幸今稿成將付棗梨、故嘉之曰『萃美』。其中法戒咸昭、俗弊悉中。詞雖淺近而皆有益身心、……但願天下之能宣講者、正己化人、……即天下之不能宣講者、亦觸目驚心、常以此為持身之具。……光緒丙午年冬月上浣岳邑吳永清撰(簡州の各村の慈善家たちは、古今の果報故事を搜羅し、案証を撰述して人に勧め、聖神の条規を記録して、男女の過咎を明らかにし、訓諭を伝えて世を暁した。幸い今稿が成って刊行にこぎつけ

たので、これを称賛して『萃美』と名付けた。ここでは法戒みな昭らかで、俗弊を悉く当てている。言葉は浅近であるが、みな心身に有益である。……願わくば天下の宣講ができる者は、己を正し人を化し、……天下の宣講ができない者も、目に触れ心に警め、常にこの書を身を持つる具としてほしい。……光緒丙午の年、冬月上浣、岳邑の呉永清撰す)

iii. 各巻の案証は以下のとおりである。

- 巻一「会円寺」(一〜二十七葉)、「双貞姑」(二十七〜四十九葉)、「雷賜銀」(五十〜前六十七葉)、「鸚鵡報」(六十七〜二百八葉)
巻二「破鏡合」(一〜五十四葉)、「賽包公」(五十五〜七十二葉)、「猷西瓜」(七十三〜九十葉)、「七層楼」(九十一〜一百十八葉)
巻三「雲霞洞」(一〜五十葉)、「双冤曲」(五十一〜七十五葉)、「審土地」(七十六〜九十二葉)、「善緣橋」(九十三〜二百一葉)
巻四「双冠誥」(一〜四十一葉)、「盧江河」(四十二〜七十葉)、「桂花橋」(七十一〜八十七葉)、「審磨子」(八十八〜一百十四葉)
巻五「血羅衫」(一〜三十八葉)、「玉連環」(三十九〜一百二十三葉)
iv. 巻五目録の裏葉には「樂中。遐齡子校書」と刻する。
v. 案証の版式は半葉八行、行二十一字。

以上の三種の原本は版式を同じくするテキストであり、復刻本の前

後関係は不明であるが、二〇〇三年に『東北地区古籍線装聯合目録』が刊行され、二〇一一年に大連数字図書館の書籍検索が完成すると、民国復刻本の所在を知ることができるようになり、テキストの全容が明らかになった。

このほかに孔夫子旧書網に出品された、巻四「双冠誥」「盧江河」「審磨子」三種(四川省眉山市東坡書屋、二〇一三年三月)、巻五「血羅衫」「玉連環」二種(同、二〇一一年六月)の版式を見ると、上記三種と同版であることを知る。また眉山市老紙行が出品した『萃美集』巻四「盧江河」(二〇〇九年九月)は、上海図書館蔵本と同じく単行本の案証である。

三 案証の全容

案証とは、もともと明太祖「六諭」(清世祖「聖諭六訓」、清聖祖「聖諭十六条」(清高宗「聖諭廣訓」)を解き明かすための例え話であり、「聖諭」の各条に分類して掲載されていたが、後には民間の神明の聖諭も加わって、様々な勧善の主旨を講じるようになり、その内容も次第に聴衆を魅了するために物語性のある説話に変化した。『萃美集』に収録された案証も物語性が強く、迫害を受けた弱者が義侠の援助を受けて幸福を手に入れるという、清代に特徴的である通俗的な義侠小説の影響が見られる。

本論では『萃美集』の案証をその内容によって、迫害と抵抗の物語、

虐待と応報の物語、善行と報恩の物語、冤罪と雪冤の物語、弾圧と逃亡の物語に分類して、こうした宣講の物語性を明らかにする。

1. 迫害と抵抗の物語

物語のストーリーは単純で爽快なものが多く、中でも好色な悪人が貞節な婦人を強奪しようとするが、義侠が出現して危難から救出し、悪人は罰を受けるといった内容が多数を占めている。

「会円寺」(全二十五葉、謳八場)は、好色な富豪が寡婦を迫害し、姑と孫が危難を逃れて復讐を果たす物語であり、義侠心の厚い尼僧が登場して寡婦を救出し、貢生(国子監生)が出現して姑と孫を支援し、孫は成長して八府巡按となり、富豪を捕らえて復讐する。

安岳県(四川)の王岐山は臨終に妻梅氏に老母李氏と子吉平の世話を托し、再婚しないように諭す。梅氏は岐山に再婚しないことを約束する。①李氏は岐山が病死すると慟哭する(十言三十二句)。梅氏は飢饉の中で必死に家族を支える。②李氏は梅氏が苦菜を食べるのを見て泣く(十言二十四句)。李氏は梅氏に再婚を勧める。梅氏は再婚できない理由を数えあげる。李氏が病気になる。梅氏は割股を行う。③梅氏は神明に祈願して腕の肉を割く(十言二十六句)。李氏は肉入りスープを飲んで病気が回復する。富豪柳四官人は関媒婆を通じて李氏に結納を贈り、梅氏を強引に娶る。④梅氏は李氏と子に別れを告げて家を出る(十言五十八句)。⑤吉平は母を奪われて泣く(十言十八句)。李氏は孫の吉平とともに湖広孝感

県に難を逃れる。梅氏は亡夫を弔うことに借りて河に身を投じようと考える。⑥梅氏は河辺で亡夫を祭る(十言二十二句)。梅氏の身体は竜宮の魚類に守られ、観音寺の尼僧に救われる。李氏は会円寺に住み、吉平は貢生曹彩雲に見込まれる。⑦吉平は彩雲に境遇を語る(十言二十二句)。吉平は彩雲の支援で読書して状元に及第し、嘉靖帝によって八府巡按を授かって帰郷する。⑧吉平は家族が見つからず悲嘆する(十言二十八句)。吉平は神の導きで観音寺に至る。⑨梅氏は李氏と吉平の安否を神に祈っている(十言三十八句)。家族は再会する。吉平は柳四官人と関媒婆を極刑に処す。

「双貞姑」(全二十四葉、謳八場)では、寡婦が近所の婦人の手引きで侵入した好色な富豪から身を守るため殺害して投獄され、その義妹も無頼に騙されて遊郭に売られて入水自殺を図る。二婦は高官に救出されて朝廷に表彰され、悪人は雷に打たれて死ぬ。

福平県⁸の李中和員外の長男玉山は同県の書生白了凡の一女金花と婚約していた。次男には一女雪桃があった。玉山が病死すると、①金花は墓前で泣いて再婚しないことを誓う(十言二十八句)。②金花は玉山の妹雪桃にも出家を勧める(十言五十四句)。③雪桃も同意する(十言六十句)。雪桃は父母に告げる。二女はともに経堂で修行する。④金花は近所の婦人劉四娘に信仰を説く(七言十六句)。金花は四娘の手引きで侵入した好色な富豪を殺害して投獄される。⑤金花は拷問に泣く(十言二十六句)。

⑥雪桃は金花に面会し、二女は泣き合う〔十言二十八句〕。雪桃は上訴しに行く途中で無頼牛金に騙され、遊郭に売られる。⑦雪花は女將に事情を訴える〔十言二十六句〕。雪花は隙を見て川に飛び込み、吏部尚書劉陞に救われる。⑧雪花は劉陞に事情を話す〔十言三十二句〕。二女は朝廷に表彰され、牛金と四娘は雷に打たれて死ぬ。

「破鏡合」(全五十四葉、謳十六場)は、好色な富豪と朋党が婦女を強奪しようとする物語であり、主人公たちが危難を避けて逃亡するストーリーを設定して物語を錯綜させる。この物語も義侠心の強い人物が続出して悪人を退ける。

三元県(陝西)の呉彩文は高仁潔を救うため公金を流用して投獄され、①妻陳秀蓉は夫を救おうと泣いて林壁山に訴える〔十言二十二句〕。秀蓉は富豪謝全恩に身売りしようとするが、林壁山が公金を補填して秀蓉を救う。②壁山は謝全恩を戒める〔十言三十二句〕。全恩は壁山を恨んで兵糧を盗んだと誣告する。③壁山の妻黄氏は悲しんで自害を考える〔十言十六句〕。④壁山の妹宝釵は嫂をなだめる〔十言十四句〕。⑤秀蓉もなだめる〔十言十八句〕。全恩は黄氏に宝釵を朋党楊德華に嫁がせるよう迫る。⑥秀蓉は宝釵の代わりに嫁いで殺すと言って別れを告げる〔十言十二句〕。宝釵は形見に破鏡を渡す。途中で悪船頭朱童が全恩と德華を殺して秀蓉を奪う。⑦朱童の母雲氏は朱童を叱って秀蓉を養女として保護する〔十言三十二句〕。宝釵は彩文らと鳳陽原まで逃亡して無頼胡廷貴に襲

われる。⑧宝釵は災難を嘆いて泣く〔十言二十八句〕。仁傑はその声を聞いて宝釵を救出する。宝釵の婚約者花雲亭は母白氏の命で林家に向かうが、途中で従者坤山に虎邱山から突き落とされ、坤山は白氏を騙して家財を持ち逃げする。白氏は三元県に向かい、従者張狗兒に金を奪われる。⑨白氏は身の不孝を嘆く〔十言二十四句〕。白氏は川に身を投じるが、黄氏と宝釵の乗った船に救われる。⑩宝釵は白氏に事情を話して誤解を解く〔十言六十二句〕。雲亭は助かるが、再び坤山の店に泊まって毒殺され、観音大士に救われて雲氏の家で秀蓉と再会する。⑪秀蓉は泣いてこれまでの経緯を説明する〔十言三十八句〕。雲亭は悪人曹子貴が秀蓉に結婚を迫っていると聞き、秀蓉に扮装して子貴に嫁ぎ、子貴が父親の葬儀で不在の間、妹春蓉に見破られる。⑫雲亭は夫人に事情を説明する〔十言十六句〕。夫人は春蓉と婚約させる。雲氏は病死する。⑬秀蓉は泣いて悲しむ〔十言二十二句〕。花亭と黄麗生は科挙に及第する。秀蓉は雲氏を埋葬するために身を売り、上京途中の麗生の妻盧氏に買われる。⑭秀蓉は麗生に事情を話す。壁山・花亭・麗生は科挙に及第して家族は再会する。⑮宝釵は親不孝な状元を罵る。⑯花亭は母に事情を話して許しを請う。壁山ははじめ一同は再会し、坤山、狗兒は雷に打たれて死ぬ。

「献西瓜」(全十七葉、謳五場)は、好色な富者が人妻を強奪するため、にその夫を毒殺するが神罰を被るといふ事件を述べる。

鳳翔府(陝西)の書生吳繡龍は読書しか知らないまじめな書生であった。

悪妻敖氏は繡龍を罵っていた。弟繡元はせむしであったが妻康氏は不満を言わず、繡龍の誕生日に出かける。①康氏は敖氏に女子の心構えを説く〔十言三十二句〕。敖氏は女子が男子を管理すべきだと主張する。富者雷仁忠は康氏を強奪するため、西瓜を食べさせて繡元を毒殺し、敖氏に賄賂を渡して康氏が秀才王輔亭と姦通して殺したと誣告させる。②輔亭は冤罪を叫ぶ〔十言二十句〕。③輔亭と康氏は冤罪を叫ぶ〔十言三十六句〕。二人は互いに相手を罵るが、敖氏に陥れられたことを知り、拷問に屈して姦通を自供する。④仁忠は金甲神に追われて誣告を自供する〔十言三十八句〕。⑤統いて敖氏も誣告を自供する〔十言三十八句〕。県令は輔亭と康氏の結婚の仲介し、仁忠と敖氏を処刑する。

「七層楼」(全二十七葉、謳七場)では、好色な悪人が人妻に恋慕してその夫を毒殺し、盗賊が義侠心から証言して始めて事件は解決する。

高県(四川)の徐達生と栄生兄弟、その妻盧氏と梁氏は仲が良かった。達生が急病死すると、①栄生は泣いて悲しむ〔十言二十二句〕。悪人頼春山は栄生の妻梁氏に恋慕して、痞子姚存厚を遣って栄生を七層楼に招待して鴛鴦壺で毒殺するが、梁氏も楼から飛び降りて自害する。山東の盗賊高傑は頼姚二人の密談を聞く。②盧氏は夢に栄生と梁氏の亡霊を見て泣く〔十言二十六句〕。盧氏は県令に訴えるが、県令は収賄して棄却する。盧氏は省城に赴き、③泣いて人々に冤罪を訴える〔十言二十六句〕。周員外は盧氏の子福保を預かる。④盧氏は子との別れを悲しむ〔十言三十四

句〕。県令劉天祐は高県に赴任する途中で帽子を風に飛ばされ、棺を開いて検屍する。⑤男女の亡霊が天祐の夢に現れて訴える〔十言二十八句〕。県令は頼家の七層楼に上るが、鴛鴦壺を発見できず、拳人王代安の母の墓を発いた罪で府に訴えられる。⑥県令は事件の解決に期限を切られて悩む〔十言三十句〕。そこに盗賊高傑が出現して証言し、拳人の母の墓の下から男女の屍体を発見する。⑦盧氏は義弟夫婦の屍体を見て悲しむ〔十言二十八句〕。県令は頼姚二人を裁く。

「双冠詔」(全四十一葉、謳十二場)では、好色な権力者が二人の女性を強奪しようとするが、女性たちは結義して危難を乗り越え、詔命を授かる。

荊陽県(安徽)の林岱香の妻張蘭香は、岱香に父の遺訓を守って読書するよう勧め、装飾品を売って科挙の旅費を作る。蘭香は留守中に子茂宣を生む。この時一婦人が現れ、①歴城県の武者趙錦屏の妻孫玉娥で、悪人馬玉山の魔手から逃れて来たと言う〔十言二十句〕。蘭香は玉娥と義姉妹となる。岱香は途中で悪人王麻子に襲われ、錦屏に救われて義兄弟となる。富者呉道国は清明節に蘭香を攫って行く。②玉娥はこれ聞いて嘆く〔十言二十二句〕。そこへ錦屏が岱香の書信を持って現れ、凶報を聞く。③蘭香は富者を罵る〔十言十二句〕。富者は拷問を加え、④蘭香は三歳の子茂宣を思って泣く〔十言三十句〕。錦屏が富者を殺すが、蘭香は官に突き出され、④拷問に泣く〔十言三十四句〕。錦屏は玉娥と茂宣を連れ

て逃走する。道国の父の門生馬玉山は蘭香を歴城へ連行する途中、母の埋葬のため身を売る王桂英を買って蘭香の侍女とする。⑤桂英は蘭香に身の上を語る〔十言二十二句〕。二女は義姉妹となる。⑥蘭香は県令の前で冤罪を訴える〔十言二十四句〕。玉山は王県令に蘭香を渡すよう要求する。県令は短刀を隠した白扇を贈って玉山を殺させる。⑦桂英が玉山を殺したと自供する〔十言三十四句〕。新県令に代わり、⑧蘭香は拷問に苦しむ〔十言二十二句〕。⑨桂英は気絶した蘭香を見て悲しむ〔十言十六句〕。岱香は三年後に学台となり山東に帰る。⑩桂英が馬前に訴え〔十言五十句〕、歴城に来て蘭香と再会する。聖旨により悪人に制裁が下り、善人に褒賞が下る。⑪玉娥は茂宣に実の親を教えて読書を勧め〔十言三十二句〕、⑫上京する茂宣に出世して母の仇を討つよう告げる〔十言二十句〕。茂宣は状元に及第して上奏し、悪人がすでに処罰されたと知り、父母と再会する。

「血羅衫」（全二十八葉、謳十二場）は、好色な富豪が人妻を強奪しようとするが、人妻は危難を逃れ、男装して出陣し、番兵を平定する。

犍為県（四川）の裴宣は狩獵をして生活をしており、①獵に出る前に妹月英に家から出ないよう諭す〔七言十六句〕。②月英も裴宣を安心させる〔七言十四句〕。裴宣は紅雲洞の千年黒狐を捕獲する。月英は黒狐を逃がし、裴宣に叱られる。月英は王鳳鳴と婚約していたが、鳳鳴が科擧のため上京すると、好色な富豪張培忠が部下熊豹に鳳鳴の殺害を命じる。③

鳳鳴は命乞いする〔十言二十句〕。熊豹は鳳鳴と義兄弟となり、鳳鳴を殺したと偽って報告する。④月英は凶報を聞いて鳳鳴を祭る〔十言三十二句〕。（欠葉裏）張家の家僕秋二が来て裴宣に銀五十両を渡す。媒酌人汪二姨が来て月英に縁談を勧める。⑤月英は汪媒婆を罵る〔十言十四句〕。月英は王家に弔問に行く。李氏は鳳鳴の死を悲しむ。裴宣は上京する。培忠は偽の裴宣の婚約書を見せて月英を娶ろうとする。⑥月英はそれを聞いて痛哭する〔十言三十句〕。月英は培忠を殺して復讐するといふ。⑦王夫人は離別を恐れて痛哭する〔十言四十四句〕。（欠葉裏）月英は培忠を殺害し、熊豹と狐仙が救う。月英は逃走する途中で強盗搜山狗・活埋人・水中跳・浪裡鯁に捕まり、捕らえられていた盧月英と出会う。⑧盧月英は身の上を語る〔十言二十六句〕。⑨月英も身の上を語る〔十言二十八句〕。二女は義姉妹となり、強盗らを騙して殺し、男装して上京する。⑩二女は行路に苦しむ〔十言二十二句〕。二女は退職した五馬太守馬仁忠の家に泊まる。裴月英は馬太守に娘月英との結婚を勧められるが、⑪馬月英に正体がばれて事情を打ち明ける〔十言三十四句〕。三女は義理の姉妹の契りを結ぶ。鳳鳴は状元に及第し、裴宣は神から武芸を授けられて熊豹とともに辺境に出征する。⑫狐仙は裴月英に法力を授ける〔十言二十四句〕。三女は出征して征戦を援助し、皆は凱旋して帰京する。皇帝は裴・馬二月英を鳳鳴に嫁がせ、盧月英を裴宣に嫁がせる。

なおこの故事は、漢川善書『三月英』（何文甫抄本）が継承してお

り、そのストーリーは以下のごとくである。

明朝嘉靖年間、四川犍為県の裴宣の妹月英は尚書王朝善の子鳳鳴と婚約していた。月英は裴宣が紅雲洞で捕らえた黒狐を放ったが叱らず、食事を共にする。①裴宣は月英に嫉について諭す〔十言三十句〕。尚書王朝善は盗賊に遭って病気になる、②臨終に妻に遺言する〔十言二十四句〕。月

英の婚約者鳳鳴は裴宣に借金して科挙を受験する。③鳳鳴の母は送別する〔十言二十八句〕、鳳鳴の回詞〔十言二十八句〕。悪党張培忠は月英を奪うため、熊豹に鳳鳴を殺させる。④夫人は血に染まった上着を見て悲しむ〔十言二十八句〕。月英は復讐のため培忠に嫁ぐ。⑤月英は夫人に別れを告げる〔十言三十八句〕、夫人の回詞〔十言二十句〕。月英は培忠を殺して逃亡するが、盗賊に捕まり、⑥土牢で昔月英と出会う〔十言三十六句〕、月英の回詞〔十言四十四句〕。二女は男装して逃走し、⑦雨で行路に苦しみ悲嘆する〔十言三十八句〕。裴月英は兄裴宣の名前で馬翰卿の娘月英と婚礼をあげ、⑧馬月英に真実を話す〔十言六十句〕。鳳鳴は張の部下熊豹に救われて、ともに番邦平定に出征し、三女もそれぞれ裴宣・盧相・馬勝となのって出陣し、馬家の花園で得た宝物花瓶を使って凱旋する。⑨裴月英は元帥に拝謁する〔十言四十八句〕、鳳鳴と月英の回詞〔十言四十句〕。三女はそれぞれ鳳鳴・裴宣・熊豹と結婚する。媒酌人汪二娘は口が腐れて死ぬ。

2. 虐待と応報の物語

いわゆる家庭内暴力であり、血縁のない後妻が先妻の子を虐待し、天罰を被るという内容の物語が多い。

「雷賜銀」(全十七葉、謳五場)では、家族を虐待する次男の嫁に雷が落ちる。

長寿县(四川)張祐中の次男全貴の妻雷氏は嫉が悪く、①厨房で長男全富の妻劉氏を罵る〔七言三十四句〕。全富夫婦は分家して西荘に追い出される。②姑楊氏が雷氏に罵られて泣く〔十言二十六句〕。③祐中が雷氏に酷使されて泣く〔十言三十句〕。④祐中は誕生祝いに迎えに来た楊氏と孫長生に苦しみを訴える〔十言十八句〕。⑤楊氏も泣いて雷氏を罵る〔十言二十句〕。長男夫婦は老父を引き取り、雷氏夫婦は雷に打たれて死ぬ。

「鸚鵡報」(全四十一葉、謳十三場)は、先妻の子と嫁を虐待する後妻が寵神に譴責される。離散した子とその妻、弟は再会する。

①犍為県(四川)の孟忠信は臨終に後妻朱氏に後を託す〔十言三十六句〕。朱氏が孤独に耐えられず病気になる、②長男長發夫婦は心配して股肝を割いて食べさせる〔十言二十句〕。朱氏は長發の毒殺を謀るが、③次男長春が母を諫める〔十言三十二句〕。朱氏は甥朱貴に命じて偽金を作らせ長發に持たせて商売に出すが、長春が別に金を贈る。朱氏は嫁王氏を虐待し、④王氏は泣いて許しを請う〔十言四十二句〕。長春は嫂を氣遣う。

長発は偽金を使って捕まり、⑤官に弁明するが、継母を庇う〔十言五十六句〕。官は孝子と見て役所に留めて読書させる。⑥王氏は虐待され長発の帰りを待つ〔十言五十六句〕。⑦長春は朱氏を諫める〔十言三十二句〕。朱氏は甥に命じて王氏を商人周培仁に売る。⑧王氏は事情を商人に訴える〔十言十六句〕。商人は王氏を義妹とする。長春は兄嫂を捜しに出て二龍岡で山賊汪四狗に荷物を奪われ、⑨運の拙さを悲しむ〔十言二十六句〕。長発は科挙に及第して兵糧の運搬を命じられる。長春は真武廟で兵法を伝授され、二龍橋で官員に出会って、⑩身分を語る〔十言三十二句〕。⑪官員は弟と知って喜ぶ〔七言三十二句〕。陳大老の鸚鵡が王氏の所在を知らせる。⑫王氏が長発に身分を語る〔十言四十四句〕。⑬朱氏は竈神の譴責に遭い、罪を告白する〔十言六十句〕。甥と汪四狗は雷に打たれて死ぬ。

〔善縁橋〕（全十八葉、謳六場）では、嫂が幼い義弟を虐待するが、義弟は唾女と出会って出世し、嫂は罪を自供して死ぬ。

富順県（四川）の尹顕栄には妻王氏と三歳の弟培栄があり、父が救った白犬を飼っていた。王氏は顕栄が子一生より培栄を可愛がるのに不満を抱く。①顕栄は培栄が母を求めるので不憫に思う〔十言二十句〕。犍為県の員外毛松雲と妻李氏には娘彩霞があり、靈祖大帝が彩霞が将来一品夫人になるため唾者にし、夢に観音菩薩が夫になる人に会えば治ると告げる。培栄が成長して顕栄が揚州に売り掛けの取り立てに出かけると、王氏は培栄を虐待し、②培栄は父母の墓前で泣く〔十言二十八句〕。王氏は

毒殺を謀るが白犬が毒を銜え去る。王氏は酒を大量に飲ませて殺し、古井戸に落とす。③培栄は井戸の中で泣く〔十言二十六句〕。培栄は雇用人に救われた後空中の声を聞いて乞食をして兄を捜し、④犍為県で訓女歌を歌う〔十言六十二句〕。員外松雲の娘彩霞はこれを聞いて唾が治って言葉を発する。員外は妻李氏を説得して培栄を家に住まわせて読書させ、培栄は翰林に及第する。⑤員外は李氏に培栄の感謝の手紙を読んで聞かせる〔十言十二句〕。培栄は帰郷して善縁橋に至り、落魄した兄顕栄と再会し帰宅すると、⑥王氏は倒れて罪を自供して死ぬ〔十言四十六句〕。

〔賽包公〕（全十七葉、謳五場）は、包公案の翻案であり、恩知らずの夫が妻を殺害する難事件で、官は亡霊の訴えを聴いて解決する。

酉陽県（四川）の王屏山と妻肖氏には娘桂英があり、姜明朗に嫁いでいた。屏山は明朗に読書させる。①桂英は明朗に読書を勧める〔十言二十四句〕。しかし明朗は桂英の醜貌を嫌って省城の旅館の女将劉春香と懇ろになり、落第して帰宅して桂英を虐待する。②桂英は泣いて我慢する〔十言三十八句〕。明朗は春香を娶り、母劉氏に罵られる。二人は共謀して劉氏の留守中に妻王桂英の頭に釘を打ちこんで殺害する。③劉氏は凶報を聞いて悲しみ、神に訴える〔十言四十六句〕。王氏の亡霊は病気の劉氏に鉛を与え、④劉氏は泣いて感動する〔十言二十二句〕。県令羅洪壁は母の誕生祝いに包公劇を上演すると、王氏の亡霊が出現して俳優を脅かす。洪壁は包公に扮して舞台上がると、⑤王氏の亡霊は訴える〔十言

二十二句)。洪璧は棺を開けて屍体を検査し、二人を極刑に処する。

「盧江河」(全二十九葉、謳七場)は、継母が前妻の子を虐待するが、継母の娘が何かにつけて庇護し、事なきを得る。

安平県(河北)の富豪朱茂林は妻楊氏との間に一子全科がいた。①楊氏は臨終に遺言を残す(十言二十四句)。②茂林は全科が母を求めたので泣く(十言二十二句)。後妻王氏は陰ひなたがあり、茂林が不在の時には全科をなぶる。王氏は一女鳳姑を儲ける。茂林は近隣の林尚香の娘岱玉を全科の嫁に娶り、鳳姑の助言を聞いて朱家に迎える。王氏は茂林が病死すると全科夫妻をいたぶり、全科に薪を運ばせて失敗すると棒で殴打する。③鳳姑はそれを見て泣いて王氏を戒める(十言三十句)。王氏は奸計を案じて全科に薪小屋で読書させ放火する。全科は鳳姑の諫めも聴かず小屋を出ないが、山で救った子犬が全科の衣服の裾をくわえて洞を通じ

て外に導く。④鳳姑は火を見て全科と生死を共にすると言って痛哭する(十言二十二句)。全科は鳳姑を慰める。王氏は毒薬で全科を殺そうとたくらむ。鳳姑は近所の田大嫂に頼んで補薬を買わせ、王氏が買った毒薬とすり替える。鳳姑は全科に家を出るよう勧め、全科は王氏を悲しませないように、盧江河の河畔に遺書と靴を置いて出て行く。⑤鳳姑は涙ながらに全科の遺書を読み上げる(十言二十四句)。林氏が懐妊すると、鳳姑は田大嫂に頼んで出産した子供を溺死させた女兒とすり替えさせて王氏に渡す。⑥王氏は鳳姑から子供の重大さを聞かされて悔悟する(十言

三十六句)。⑦鳳姑は田大嫂を主席に座らせ、真実を打ち明ける(十言五十句)。王氏は孫天保を抱いて鳳姑に感謝する。全科は揚州で身を売って兄を埋葬しようとする鄭坤元に銀二百両を渡して救う。そこへ頼老大が迎えに来る。

「審磨子」(二十七葉、謳十七場)は、後妻がその甥と共謀して先妻の子を虐待する物語であり、後妻は天を欺くことはできず、罪を自供して極刑に処される。

宋朝仁宗の時、陝西省漢中府郿県九洞橋のそばに劉子忠、子明兄弟がいた。子忠は岳池県の知県にまでなったが、丁憂で帰郷し、妻陳氏が病死したため、馬氏を娶ったが甥馬保と悪行を尽くしていた。子明は妻王氏との間に一子定生がいた。馬氏が騒ぐので兄弟は分家する。子忠は馬保を同伴して岳池県の陳学古の借金を取り立てに行くが、陳家は落ちぶれていて、子陳良と争いになり、子忠は陳良を打ち殺す。①子忠は張県官に経緯を話す(七言二十六句)。馬氏が救わないため子明と王氏は岳池県に駆けつける。②子忠は自分が犯人だと訴える(七言二十句)。③子明も自分が犯人だと訴える(七言十句)。④官は生牌と死牌を引かせて決めると告げる(七言二十二句)。子明は兄の死牌を取って死罪となる。⑤兄弟は獄中で面会して互いに痛哭する(七言十句)。⑥定生は父と面会して互いに泣く(十言三十四句)。太白金星は文曲星劉子明に温暖丸を口に含ませて死体の腐敗を防ぐ。⑦定生は父の死体を抱いて痛哭する(十言十句)。

⑧王氏は帰郷した子明の棺を見て泣く〔十言二十二句〕。⑨子忠は王氏を慰める〔七言十八句〕。⑩馬氏は王氏が家を出ないと言うので罵る〔七言十八句〕。⑪王氏は家を追い出されて河に身投げする〔十言二十句〕。吏部天官文彦修の夫人陳氏がそれを見て救い、養女として同伴して上京する。馬氏は定生に罪人を演じさせて拷問する。⑫定生は必死に許しを請う〔十言六句〕。馬氏は馬保の奸計を用いて焼いた盃を定生に持たせる。⑬盃を落として子忠に打たれた定生は、子明の墓前で痛哭する〔十言二十二句〕。馬氏は馬保の奸計を用いて小磨を首に懸けて定生を殺すことにするが、定生が子忠と寢床を換えたため、誤って子忠を殺す。張県官は現場検証をして被疑者を県に連行する。⑭馬氏は訴えを述べる〔七言四十四句〕。⑮定生は訴えを述べる〔十言五十二句〕。官は小磨を拷問する。⑯旋風が起こつて馬氏が真相を語り、善悪の応報を告げる〔七言二十二句〕。県官は馬氏と馬保を極刑に処し、子明は蘇生する。定生は状元に及第して郟県知県となり、母王氏と再会する。⑰王氏と状元は互いに身上を明かす〔七言五十二句〕。母子は文家を訪れて夫人に挨拶する。

「桂花橋」(十七葉、謳五場)は、後妻が夫の死後に先妻を殺害する。先妻の子は竈神に庇護されて難を免れ、出世して母の無念を晴らす。

本朝乾隆時江南常州府黄池県に国学生王必達があり、富豪で善行を好んだが賢妻謝氏との間には子供がなかった。謝氏は養子を取ることを承知せず、妾林氏を娶り、一子定邦を生むが、林氏は性格が悪かった。謝氏

にも一子定邦が生まれた。①必達は危篤になり後を二婦に託す〔十言十八句〕。二婦と三子は仲が悪くなり、謝氏の背に瘡ができると、林氏は針で瘡を刺して謝氏を殺す。さらに定邦を菜刀で殺そうとするが、身震い起きて刀を落としたためやめる。竈君が救ったのである。林氏は定邦にぼろを着せて桂花橋に置き去りにするが、ぼろには周恒泰の借金銀二百串の字約(証文)があった。趙光前・熊正綱が見つけて陝西の冗員外が引き取り、熹来と名付けて学問をさせ、娘秀英を娶らせる。熹来は科挙に合格して黄池県の知県として赴任する。②熹来は員外から身の上を聞いて員外に別れを告げる〔十言十八句〕。③謝氏の亡霊は土地神の示唆で熹来の夢で訴える〔十言三十六句〕。林氏母子は家産を蕩尽して周恒泰から負債を回収しようと考える。熹来は桂花橋で母子に遭つて身の上を明かす。④林氏は熹来にわびる〔十言二十四句〕。恒泰は借金を返そうとしないが、熹来が証文を見せると金利併せて銀一千六百十串を返す。熹来は母の死因を知るため、墓を移すと言う。乾隆帝は江南の賢者を訪ねてその現場を見る。⑤熹来は墓から銀の針を見つけて泣き出す〔十言三十八句〕。乾隆帝が天罰が下るべきだと叫ぶと、林氏に雷が落ちて焼死する。謝氏が林氏を捕らえて冥王に質すと、冥王は判官に善悪簿を調べさせて二婦の前世で姉妹であったと告げる。乾隆帝は熹来に西安知府を授け、員外には大夫の職を賜う。

3. 善行と報恩の物語

「雲霞洞」(五十葉、謳十二場)では、善良な主人公の子女が兵乱を避

けて逃亡し、恩を受けた人物の援助を受けたり、神助を得たりして危難を乗り越え兵乱を平定する。

京陵県の富者蘇通貴と妻嚴氏は善行に努め、登金・登榜・雲霞の二男一女を儲ける。洪水で溺れる鴻雁・毛犬・黒猿を救う。また川に身を投げる男も救う。①男は黄忠善といい、兄忠礼が張善洪に誣告されたと言う〔十言二十六句〕。②婦人李氏は夫愈福田が父を葬るため、王客人との再婚を命じられたと悲しむ〔十言十八句〕。通貴は費用を援助して夫婦を救う。③女子蓮香は母杜氏の死体を守って泣く〔十言十四句〕。通貴は蓮香を養う。登金は周氏を娶り、④通貴夫妻は遺訓を述べて死去する〔十言四十四句〕。柳雲亭が岳父の弔問かたがた借金に來る。雲霞は雲亭を将来有望と見、蓮香に勧められ花園で金を贈って上京させる。海南の盜賊が京陵を襲い、⑤蘇兄弟は泣いて別々に逃亡する〔十言十六句〕。登榜が崖から飛び降りると黒猿から救われる。黒猿は周氏も救い、忠善は通貴の嫁だと知って黄家で養う。雲霞と蓮香は川に飛び込み、蓮香は漁師芳雲に救われて養女になる。登金は川に身を投げると黒狐が救って雲霞洞に匿い、兵法を授ける。建康の全豹は張翁の娘秀英を強奪するが、秀英は縊死したため、次に芳雲の家に住む雲霞を狙う。⑥蓮香は雲霞の身代わりになると言う〔十言三十八句〕。蓮香は全豹に嫁いで刺し殺す。劉氏と雲霞は陰都に至り、悪人黄道貴に強奪される。⑦劉氏は官に訴える〔十言三十二句〕。劉県令は劉氏を觀音寺に置く。雲霞は道貴を打ち殺し、土牢に監禁されるが、黒猿が饅頭を運ぶ。⑧鴻雁に血書を託す〔十言三十

四句〕。⑨劉氏は血書を見て悲しむ〔十言三十四句〕。黒猿は登榜を潼關に送る。狐仙は登金を洞から出す。忠善は周氏と義兄妹となり、官保を連れて建康に行き、芳雲から蓮香・雲霞のことを聞く。芳雲は周氏が蓮香の嫂と知る。そこへ愈福田夫妻が來る。忠善は護送される蓮香を救うことを提案して実行する。⑩劉氏は雲亭・登金・登榜に会って、雲霞が土牢に監禁されていることを訴える〔十言三十六句〕。黒猿と狐仙は雲霞を救い洞に匿う。⑪狐仙は雲霞の兄たちに兵乱を平定させたことを告げ〔十言三十四句〕、火龍珠・杪木箭・捆仙繩を授けて下山させる。雲霞は殷鸞英・馬貴英・高秀英の飛刀を打ち破って投降させる。諸將は褒賞を受ける。⑫狐仙は皇帝に別れを告げる〔十言二十八句〕。皇帝は狐仙を神に封じる。

4. 冤罪と雪冤の物語

「双冤曲」(二十四葉、謳九場)は、善良な農民とその妻が同時に殺人の罪を被るといふ衝撃的な事件を述べ、義侠心の厚い盜賊、孝子を支持する県令や学院、殺害された亡霊が事件の解決に協力する。

雲陽県(四川)の許正大と妻謝氏は善人であった。母李氏は謝氏が寵君六戒を守っているのです子を授かると予言する。近所の張洪加は不孝者で母楊氏に食事を与えなかった。①楊氏は天を仰いで嘆く〔十言三十二句〕。近所の富者何廷祥は正大の田畑を奪うため、雇用人を毒殺して裏庭に首を投げ入れようと図るが、洪加に見られてついでに刺殺する。隣人羅成仙

が首を見つけて梟に訴える。②正大は冤罪を訴え〔十言三十二句〕、③獄中に面会に来た謝氏に後を託す〔十言二十八句〕。盗賊張了凡が人助けをして正大の家に来る。近隣の悪人李鉄牛は謝氏を姦淫しようと謀り、李氏と子桂喜を殺そうとする。④謝氏は鉄牛に許しを請う〔十言二十句〕。了凡はこれを見て鉄牛を殺すが、謝氏が冤罪を被り、⑤謝氏は官に冤罪を訴える〔十言六十句〕。⑥桂喜は謝氏に面会して悲しむ〔十言二十六句〕。県令の母は孝心に感じて謝氏を寛大に扱おうと命じる。桂喜は入学して、⑦学院に父母の冤罪を訴える〔十言四十六句〕。学院は事件の解決を約束し、娘月香を娶らせ、洪恩と改名し、ともに上京する。洪恩は祖先の祭祀に帰郷する途中、⑧了凡が謝氏を守るため鉄牛を殺したと自供し〔十言二十六句〕、県に赴いて正大と謝氏を出獄させる。⑨何廷祥は雇人の亡霊に迫られて洪加殺害も自供し、皆に悪事を行わないよう勧めて〔十言一百句〕、喉を割いて惨死する。

「審土地」(全二十七葉、謳六場)では狡猾な番頭が主人の死後に偽の借用書を作って訴訟を起こし、その財産を奪おうとするが、土地神が証人となってその欺瞞を発く。

巴県(四川)の商人雍百川は正直者であったが、番頭劉忠信は狡猾であった。百川は忠信に正直に生きるよう諭して資金を与えて開店させる。貧乏な士人鄭元安の子茂林は聡明であったが、祖母が死んで葬儀ができないので自分を売るよう説く。①母李氏は別れを悲しむ〔十言十八句〕。百

川は事情を尋ねる。②茂林は母の葬儀のために子を売ることを語る〔十言十六句〕。百川は養子にしたいと言い、元安に銀二十両と棺を与える。③百川は妻に子がないのは運命だと言う〔十言二十句〕。神が夢に現れて子を授けると告げ、妻李氏は一子桂林を出産する。桂林は聡明で、百川はいっそう善行に努め、神が山東省城隍祠になると告げる。④百川は死期を悟って家族に教訓を遺す〔十言三十四句〕。忠信は百川の死を知って偽の借用書を作り、県に訴えて李氏から銀三百六十両をだまし取る。桂林は母を慰める。⑤忠信は味を占めて再び訴える。李氏は無実を訴える〔十言三十四句〕。裁判官も忠信を諭すが、忠信は百川が悪辣な商売をしていたと中傷する。裁判官が土地神を証人として喚問すると言うと、⑥土地神が官の部下の老総に憑依して忠信が偽の借用書を書いたことを証言する〔十言三十二句〕。忠信は天罰を受けて病気で倒れ、全身に蛆がわいて死に、二子は犯罪で投獄され、乞食をする。

5. 弾圧と逃亡の物語

「玉連環」(二十八葉、謳九場)は、明の嚴世蕃に弾圧を受けて逃亡した三組の男女が危難を克服して結ばれ、お節介をした悪人は天罰を受ける。

江南省揚州府出身の尚書崔富には妻秦氏、子良英、娘宝霞があったが、嚴世蕃父子の専権を見ると官を棄てて海瑞とともに帰郷し、良英に史丹霞と婚約し、玉連環を結納としたことを告げる。しかし世蕃父子が忠臣を

迫害したと聞くと血を吐いて死ぬ。①良英と宝霞は父の死を悲しむ〔十言二十八句〕。世蕃が搜索すると、良英は母と妹を連れて安微に逃れる。史培忠は女装し、丹霞は男装して逃走する。盧雲卿と喜童は女装して逃れ、②廟の中で仏に救いを求める〔十言二十二句〕。世蕃の部下趙文忠の弟文炳は王秀才の月娥を強奪する。文炳は女装した雲卿と喜童を捕らえるが、世蕃に召喚されて家を出る。②月娥は雲卿に強奪された事情を告げる〔十言二十二句〕。雲卿と喜童は月娥を連れて逃亡する。③秦氏は良英と宝霞に遺言を残して死ぬ〔十言三十六句〕。解梁城の英雄杜興は五馬太守の子で、良英に逢って義兄弟の契りを結ぶ。良英は復讐のために杜興とともに上京する。④良英は霊前に別れを告げる〔十言二十四句〕（欠第五十二葉）。文炳は宝霞を捕らえる。⑤宝霞は文炳に酒を勧める〔十言三十八句〕。宝霞は杜興の助力で文炳を殺し、良英とともに逃げる。⑥宝霞は自分の経歴を語る〔十言三十四句〕。女装した雲卿は宝霞が別れた妻だと知る。⑦月娥は宝霞に身の上を語る〔十言二十四句〕。女装した培忠と男装した丹霞の兄妹は鳳翔の古廟で大男が女子に結婚を迫るのを見る。⑧女子は大男を罵る〔十言十二句〕。培忠は男を殺す。女子は羅金花だとわかる。嚴家の執事の子嚴高は丹霞らを強奪する。培忠は追いかけて金不換に逢い、金不換が法術を使って丹霞らを救って鳳凰山に送り、嚴高を懲らしめる。忠臣の子孫たちは鳳凰山に集結する。⑨雲卿は素性を明かす〔十言二十句〕。雲卿は宝霞と結ばれ、良英は丹霞と結ばれ、培忠は金花と結ばれ、杜興は月娥と結ばれる。兵部尚書蘇通鳳の家僕蘇籍は誤解されて蘇家を追放されるが、嚴家に入って蘇家に報恩しようと考え、世

蕃が蘇一族を捕らえるのを通報して子女の身代わりになると言う。（六十八頁）蘇籍は世蕃に請うて夫人を祀る〔十言三十二句〕。家僕蘇富も世蕃を罵って惨殺される。蘇公子は自分の身代わりに侯成壁に殺された義僕蘇華の墓前で痛哭する〔十言二十八句〕。涇陽県の富者孫廷芳は娘小臣をさらう。妻李氏は非道を諫める〔十言二十六句〕。李氏は廷芳が聞かないので逃亡を助ける。廷芳は背に靡ができて死ぬ。李氏は近所の不孝者牛金児を諫める〔七言三十句〕。牛金児は小臣らの荷物（色囊）を奪う。小臣らは鳳翔府で総兵李化堂の子春融を殺して捕まる。小臣は県令に訴える〔十言三十二句〕。英雄たちは小臣を救う。蘇桂芳は鳳翔府の関王廟で兪員外の娘彩玉と出会う。桂芳は境遇を語る〔十言三十句〕。彩玉は桂芳に銀を贈る約束をし、玉連環を贈る。桂芳は玉圈を贈る。しかし店主が色囊を盗んで客を殺したため冤罪を被る。桂芳は身分を明かして県令に無罪を訴える〔十言三十八句〕。侯家の娘珊瑚は獄中に桂芳を見舞い身分を明かす〔十言三十句〕。月娥は珊瑚主僕に鳳凰山の英雄が桂芳を救うことを告げる。兪彩玉は鎮台張仁山に捕まり、身の上を語って妾にしないように請う〔十言二十六句〕。彩玉は逃げ回り、盧殿卿と馬雲中は仁山を殺して救う。蘇珍・蘇璧・蘇宝兄弟は真武帝から十八般武芸を授かり涇陽県に至る。世蕃に処刑された都察院王忙の子夢生が変装して逃亡したが捕まったと県令に訴える〔十言二十二句〕。三兄弟は護送車を襲って夢生を救う。張把総は犯人を追うが、鳳凰山の英雄たちに敗れる。蘇公子は珊瑚・彩玉を妻とする。趙洪春は紫陽山で好色な山賊蔣豹を殺して頭領となり、嚴高を捕らえて鐘呂臣・李雲章を救い、嚴高と牛金児を処

刑する。道士冷如氷は詩句により鳳凰山に結集するよう説く〔七言三十句〕。嚴貴に捕らえられた白良玉の娘玉蟾が泣いて身の上を語る〔十言五十句〕。三人は嚴貴を殺し玉蟾ら女子を救って鳳凰山に向かう。盧雲卿は將軍楊国忠が投降した偽書を朝廷に見せると、世蕃はその母と妻の首を送る。国忠は号泣する〔十言二十八句〕。雲卿らは捕らえられた国忠を救い、鳳凰山に迎える。雲卿らは下山して科挙を受験して三元十八学士に及第し、内閣学士程榮陞に世蕃を倒す計略を話す。雲卿らは六十四道の表章を上奏して世蕃の悪事を暴き、世蕃親子を惨殺する。末尾に勸世の詩句を置く〔七言二十句〕。

五 結論

大連図書館蔵民国復刻本の出現によって『萃美集』五巻の編者が清の呉榮清であり、合計十八篇の案証を収録していることが明らかとなった。その序文には簡州各地の慈善家がこの書を編纂したという。大連図書館蔵本は中国社会科学院文学研究所蔵本・上海図書館蔵本と同版であるが、三本の刊行された場所はそれぞれ成都・重慶・瀘州と異なり、本書は四川省の各地で刊行されたと思われる。また四川で編集された宣講書であるため、案証十四篇の中でも「会円寺」（安岳県）・「雷賜銀」（長寿県）・「鸚鵡報」（犍為県）・「賽包公」（西陽県）・「七層楼」（高県）・「双冤曲」（雲陽県）・「善縁碣」（富順県）・「血羅衫」（犍為県）の八篇が四川の「案証」である。本書は『宣講集要』『宣講拾遺』など

初期の説唱宣講書と同じように、もともと「聖諭宣講規則」を掲載していたが、案証は「聖諭」によって分類されておらず、しかも物語性の強い内容であり、単行本として刊行されることにもなったと考えられる。本書は聖諭宣講の物語化を明証するよい例と言えらるであろう。

注

- 1 『中国古代小説研究』、北京、中国社会科学院文学研究所中国古代小説研究中心編、第一輯、三五九～三七二頁、二〇〇五年。
- 2 巻頭には「宣講聖諭規則」が掲載されていたと思われる、この前に『聖諭六訓』『聖諭十六条』等が掲載されていたと思われる。
- 3 「……」部分は欠損。「銅邑」は銅梁県（四川省重慶府合州銅梁県）。
- 4 巻三の一案証、巻四の三案証、巻五の二案証を欠く。
- 5 王榮国等編『東北地区古籍線装聯合目録』、二〇〇三年、遼海出版社（瀋陽）。集部戯曲類鼓詞之属、三五三四頁。「女」は「文」の誤刻。
- 6 四川省樂至県。
- 7 巡按御史は明代に設けられた。八府巡按という職名はなく、戯曲・小説で使用する架空の職名である。
- 8 不詳。富平県であれば陝西省。
- 9 偶数句の下に白氏の言を挿入する。

（阿部泰記 長江大学講座教授、山口大学大学院東アジア研究科教授）